

## &lt;Ⅶ 展示研究報告 (6)&gt;

令和元年度第7回企画展  
「教員研究成果展」石垣 悟<sup>\*1</sup> 小口 悦子<sup>\*2</sup> 大宮司勝弘<sup>\*3</sup>

令和元年度に開催された「教員研究成果展」(会期：令和2(2020)年2月27日(木)－4月24日(金))では、教員の専門分野における研究成果を紹介している。

## 令和元年度教員研究成果展展示報告

(「日本の笠～その歴史と民俗～」)

石垣 悟

## はじめに

「かさ」と入力して漢字変換すると、「笠」と「傘」の2つの漢字が有力候補として表示される。今日では、「笠」も「傘」も、ともに雨風や日差しなどを避けるために頭上にかざす道具をさす。しかし、厳密に言えば、それぞれの漢字の構成要素から想像つくように、「笠」は立っている人の頭の上に載せる竹様の道具であり、「傘」は人々の頭上にかざす持ち手となる棒の

付いた道具である。「笠」は頭にかぶり、「傘」は頭上にさす。日本では、どちらの「かさ」も江戸時代以前から用いられてきたが、特に庶民の間では「笠」がよく用いられてきた。「傘(和傘)」は、高貴な人が用いることが多く、庶民に普及してくるのは江戸時代後期以降のことである。

今回の研究成果展では、庶民の生活に深く根ざしてきた「笠」の歴史と民俗について考えてみた。展示した資料は、下記のとおりである。

日本の笠は、その形態・造作から大きく5種に分けることができる。編み笠、組み笠、張り笠、縫い笠、塗り笠である。このうち庶民が主として用いてきたのは、編み笠、組み笠、張り笠、縫い笠の4種になる。いずれの笠も、夏場は風雨や強い日差しを、冬場は雨や雪を避けるため用いられた。軽くて丈夫で、通気性

資料名称	使用地(採集地)	特徴・用途など
編み笠(ぼっち笠)	千葉県成田市	良質な藁草を編んで作られている。
組み笠(桧笠)	石川県白山市	桧の薄板を網代に組み上げた笠。
組み笠(宮笠)	岐阜県高山市	イチイの薄板を網代に組み上げた笠。
張り笠(基八笠)	佐賀県鹿島市	竹の骨組みに筍の皮をあて、細い竹ひごで押さえている。浅浦基八という人が作り始めたと言えられる。
張り笠(クバ笠)	沖縄県	竹の骨組みにクバの葉をあてている。
張り笠	台湾宜蘭	宜蘭の雑貨屋で売られていたもの。竹の骨組みに筍の皮を張っている。
縫い笠(菅笠)	富山県高岡市	竹の骨組みに菅の葉を縫い付けた笠。角笠という最もよくみられる形状。
縫い笠(菅笠)	富山県高岡市	竹の骨組みに菅の葉を縫い付けた笠。ヘルメット笠という近年考案された形状。
ヒコサ頭巾	秋田県羽後町	黒い木綿で作られた袋状のかぶり物。目穴だけが開けられており、祖霊の姿を表すという。
編み笠・端縫い	秋田県羽後町	顔を隠すように編み笠をかぶる。端縫いは、代々受け継がれた絹の切れ端で仕立てた着物。
笠地蔵(絵本)		笠をかぶった地蔵様が福をもたらす昔話。
かぶる日傘		オリンピック・パラリンピック公式で推奨されるかぶり物。

## 研究成果展・展示資料一覧

\*1 石垣 悟(いしがき さとる) 令和元年度現代生活学部現代家政学科准教授

\*2 小口 悦子(おぐち えつこ) 令和元年度現代生活学部食物学科教授

\*3 大宮司 勝弘(だいぐうじ かつひろ) 令和元年度現代生活学部現代家政学科助教

もよいのが特徴で、年間を通じて屋外での活動で重宝されてきた。なお、塗り笠は、組み笠や張り笠のうえに和紙を何枚か重ね張りし、漆や柿渋などを塗った撥水性の高い笠で、武士など比較的身分の高い人々に用いられた。

庶民が暮らしの中で用いてきた4種の笠の材料や形状、造作などを比べてみると、地域性や歴史的な展開、さらには東アジア諸国との繋がりなどがみえてくる。また、その使用目的・機能に注目すると、文化としての笠が本質的にもっていた重要な役割を知ることができる。

### 日本における4種の笠とその特徴

編み笠は、藁や藺草の芯を数本ずつ束ねながら編み上げた笠である。骨組のない柔らかな笠で、広がった形状のほか、狭まった形状のものもある。この笠は、農村部で作られ使われてきた。東日本を中心に広くみられ、特に千葉県や茨城県では「ほっち笠」の名で親しまれてきた。特殊な工具を用いなくても作ることができるため、農家が自家で作ることもできた。使い古した編み笠は、田畑の肥料にもされたようである。江戸時代中期以降、二毛作が普及してくると、畳に用いる良質な藺草を利用した編み笠も作られるようになった。今回は、千葉県成田市で製作された編み笠（ほっち笠）と秋田県羽後町の編み笠を展示した。

組み笠は、薄く剥いだ幅1cm弱の木の板を円く網代に組み上げた笠である。網代とは、縦横交互に組んでいく技法で、籠や敷物、さらには民家の天井にまで広く用いられてきた。網代の模様を底につけた縄文土器も見つかっており、かなり古くからある技法であったことがわかる。日本には、組み笠の産地が数か所ある。長野県木曾郡南木曾町、岐阜県高山市、石川県白山市、和歌山県田辺市、鳥取県鳥取市（旧佐治村）などはよく知られた産地であった。いずれの産地も山深い地域で、この笠が「山の笠」であったことがわかる。専門の職人が勘と経験を頼りに組み方や角度を工夫することで、美しい円錐状の笠を組み上げた。周囲の山に自生する木を利用するため、東西／南北に細長い日本列島では、利用する木にも地域性がみられる。最もよく利用されるのは桧であるが、他にもイチイ（岐阜県高山市）やウリハダカエデ（鳥取市）などもあった。

今回は、桧の薄板を網代に組み上げた石川県白山市の「桧笠」、イチイの薄板を網代に組み上げた岐阜県高山市の「宮笠」を展示した。

張り笠は、細く割った竹で作った骨組みに、木の皮や葉を覆いかぶせるように張り付けた笠である。皮や葉が浮き上がってこないように細い紐や竹ひごで押さえつけるため、「押さえ笠」ともいう。この笠は、主に農村部で作られ使われてきた「里の笠」である。骨組みに張り付けるのは、筍の皮が最も多い。そのため、筍の皮が手に入りやすい西日本によくみられ、関東以北ではあまりみられない。今回展示した佐賀県鹿島市の張り笠は、浅浦甚八なる人物が作り始めたと伝えられていることから、九州北部で「甚八笠」の名で広く知られていたものである。また、沖縄や台湾の張り笠も展示したように、張り笠は日本列島のみならず東アジアまで広く分布する。沖縄の張り笠は、自生するクバ（蒲葵）の葉を張り付けた「クバ笠」である。台湾の張り笠は、北部の都市、宜蘭の雑貨屋で手に入れたもので、今も農作業などで使われている。店頭にはこの笠の横にビニールを張り付けた張り笠も売られていた。張り笠が地域や時代に応じて入手しやすい材料を巧みに利用してきたことも想像できよう。

縫い笠は、細く割った竹で作った骨組みに、草の葉を縫い付けた笠である。使われる葉は、ほとんどが菅であるため、「菅笠」ともいわれる。縫い笠もまた、農村部で作られて使われてきた「里の笠」である。細長い菅の葉を隙間なく重ね合わせ1枚ずつ丁寧に縫い付けていくため、専用の用具と技術を要する。菅笠は、笠縫氏の居住した今の大阪市東成区深江が発祥とも伝えられるが、秋田県男鹿市、山形県西置賜郡飯豊町、新潟県糸魚川市（旧能生町）、富山県高岡市（旧福岡町）、福井県福井市（旧清水町）、鳥取県鳥取市（旧鹿野町）など、本州各地に産地があった。中でも今回展示した縫い笠の産地、富山県高岡市（旧福岡町）は、今も盛んに菅笠を製作する一大産地で、男鹿市や福井市（旧清水町）などもここから製作技術を学んだといわれる。旧福岡町のような大きな産地になると、「かさすげ（笠菅）」と称する笠専用の菅をわざわざ栽培した。笠に適した葉幅の広い丈夫な菅を栽培・利用することで、より質のいい菅笠が作られ売り捌かれたのである。下図のように、縫い笠は、骨組みの形状を変えることで



様々な形状の縫い笠（菅笠）

様々な形の笠を作ることができる。伝統的な形状だけでも10種近くあり、近年ではヘルメット形のものまで作られている。

### 日本における笠の歴史的展開

これらの伝統的な笠の起源については、必ずしも明確ではない。「旅の僧から教わった」「～(地域名)～から伝えられた」などといった言い伝えが各地にみられる。このことは、他地域との交流の中で笠作りの技術が生まれ、伝承されてきたことを予測させる。4種の笠について、その材質や造作、産地などを比較してみると、おおよそではあるがその歴史を紐解くことができそうである。

まず、4種の笠のうち、最も簡便に作られたのは編み笠であろう。特殊な道具や技術を要せずに行うことができ、藁を材料とすれば農家なら自家で作ることができた。草履や草鞋を作るのと同じ感覚で藁仕事として行うことができたのである。そのため使い古すと田畑の肥料等にも使われた。これが産地形成されてくるのは、材料に藁草を用いるようになって以降と考えられる。

この編み笠以外の3種の笠をみると、いずれも特殊な道具と技術を要する。例えば、3種の笠のいずれも木や竹を細く剥いていくための道具が必須である。また、組み笠では網代に編みながらきれいな円錐を作る熟練した技術が必要であったし、張り笠や縫い笠でも細い竹ひごから円い骨組みを作るための一定の技術が必要であった。そのため3種の笠については、専用の道具があり、専門に製作する職人がいた。

また、この編み笠以外の3種の笠は、組み笠と張り笠・縫い笠の2つに分けることもできる。組み笠には骨組みがなく、張り笠・縫い笠には骨組みがある。また、組み笠は山間部で作られる「山の笠」で、張り笠・縫い笠は農村部で作られる「里の笠」である。この違いは何を意味するのだろうか？日本にみられる組み笠のほとんどは、薄く剥いだ木を用いる。東アジアには細い竹を網代に組んだ笠もあり、日本でも輸入・販売されているが、日本産の組み笠にはなぜか竹はほとんど用いられない。竹を用いる笠は、張り笠と縫い笠(の骨組み)の方になる。竹を用いるか否かは、基層的文化要素の問題も絡んで重要な可能性を内包している。すでに知られているように、箕の造作と材料については、網代／竹と藁／竹以外(樹皮)という対比があり、基層的文化要素の違いが指摘されている。これを参照すると、網代／竹以外(剥いだ木)という組み笠の造作／材料は、日本列島における文化要素の複雑

な絡み合いを示唆するかのようである。

その意味では、竹の骨組みを用いる張り笠の広がりも注目される。張り笠では、沖縄のクバのような地域性のある材料も用いられるが、東アジア諸国も含めて竹の骨組みに筍の皮を張り付けた例が圧倒的に多い。竹を重要な材料とする南方に連なる工芸文化が日本列島まで及んでいる様相を捉えることができる。

また、張り笠は、押さえ笠とも呼ばれるように、竹の骨組みの上に筍の皮などを置き、その上に細い紐や竹ひごを渦巻き(あるいは星形)を描くように張り巡らして押さえつける。この張り笠の造作と縫い笠の造作を比較すると、そこに歴史的展開を読み取れる。縫い笠もまた竹の骨組みのうえに植物の葉を載せる。従って広い意味で張り笠といえなくもない。ただし、その張り付け方が実にきめ細かい。細い菅の葉を縫い針で一枚一枚丁寧に縫い付けていくのである。しかも大産地になると、この菅をわざわざ栽培までしている。品種改良とまではいかないものの、できるだけ葉幅が広くて丈夫な菅の株を選別して栽培し、専ら笠に利用しているのである。つまり、縫い笠は、技術的にも、また材料調達の間でも、張り笠を洗練した笠といえそうなのである。

以上のことをまとめると、編み笠は最も素朴で古くからある笠といえ、いっぽうで組み笠や張り笠の技術自体は古くからあるものの、ある時期から東アジアの影響も受けつつ職人が作り始めたものと考えられ、さらにはその張り笠から縫い笠が発展的に派生したと推測されるのである。菅笠は、日本の笠の1つの到達点であったともいえよう。

こうした伝統的な笠の多くは、今や風前の灯火である。私たちは日常生活の中で帽子をかぶる機会はあるものの、笠をかぶる機会はほとんどない。笠の需要が減った結果、職人も激減し、後継者も不足しているのが現状である。いっぽう、この笠が見直される可能性も出てきている点に言及しておきたい。東京オリンピック・パラリンピックは、猛暑が予想されることから、東京都は様々な対策を提案している。その中に「かぶる日傘」なるものがある。同じものは、すでに釣りなどのアウトドアで使われており、頭に被ることで日差しを避けつつ両手を自由にした日傘である。それは、形状からいえば「笠」に他ならない。「笠」にもかかわらず、「傘」の字を使っているあたりは、現代の私たちが「笠」を忘れつつあることの証左でもあろう。「かぶる日傘」を契機に、伝統的な日本の笠にも改めて光が当たってほしいものである。



### 笠をかぶる＝変身する

今回の展示でもう1つ取り上げたのが、笠のもつ象徴的機能である。笠は、実用性の高い用具である。冒頭触れたように、雨風や日差しを避けるため、洋の東西を問わず人は古くから笠を用いてきた。もっといえば、オランウータンなども雨除けに大きな葉を頭に載せるといふから、霊長類にとって笠は普遍的なかぶり物の1つなのかもしれない。

しかし、人が他の霊長類と決定的に異なるのは、笠に実用的な機能とともに、象徴的な機能を見出していることであろう。象徴的な機能とは、信仰的な機能と言い換えてもいい。つまり、笠をかぶることで、人は「異界のモノ」に変身できるのである。

佐賀県佐賀市で毎年2月第二土曜日に行われるカセドリという小正月行事がある。蓑を着け、笠をかぶった男性が2人一組で家々を訪れる。この蓑・笠姿の訪問者は、年／季節の変わり目に家々の災厄を払い、福をもたらす神である。手にした竹を床に打ち付けて災厄を払い、大福帳を置いて立ち去る。

笠をかぶった神が訪れる、という点ですぐに思い起こされるのは、昔話「笠地藏」だろう。笠をかぶった

地藏様／神様が年越し（大晦日）の晩、老夫婦のもとを訪れて金銀財宝／福をもたらす。笠をかぶらなかった地藏様は手拭いを頬かむりした。笠と並んで手拭いも神の訪れを象徴するアイテムだったらしい。

秋田県雄勝郡羽後町の西馬音内で毎年8月16日から18日の晩に行われる盆踊りでも笠をかぶった異界のモノ／祖先の霊が訪れる。盆踊りは、いうまでもなく盆に帰ってきたご先祖様とともに踊ることで、その供養を行う芸能である。踊り手の衣装は、2種類ある。1つは、編み笠を顔を隠すようにかぶり、端縫いと呼ばれる着物を着た姿である。端縫いは、絹の端切れを左右対称に縫い合わせて仕立てた美しい着物である。もう1つは、ヒコサ頭巾という黒頭巾をかぶり、浴衣を着た姿である。ヒコサ頭巾は手拭いのようなもので、頭部をすっぽりと覆う。編み笠を深くかぶって顔を隠すことも、ヒコサ頭巾で頭部を覆うことも、今は亡きご先祖様の姿を表している。編み笠をかぶると人はご先祖様になるのである。

このように笠には実用的な機能だけではなく、信仰に裏付けられた象徴的な機能もある。この点でいえば、今の私たちがかぶる帽子も同様なかもしれない。実用的な機能だけでなく、ファッションというある種の象徴的機能も併せ持っているだろう。

### おわりに

「笠」1つとってみても、そこから様々な歴史や民俗の可能性を見出すことができる。笠が日本で古くから使われてきたことは間違いないが、笠の使い方や作り方に関する古い記録はあまりみられない。生活文化にはこうしたものが少なくない。そうしたとき、実物資料とそれをめぐる情報を集積して比較してみると歴史や民俗にせまっていけるとするならば、それができるのが博物館であり学芸員であるということになるだろう。

## 学生と共に地域と共に

小口悦子

昨今、大学他、教育の現場では「地域」との連携が求められ、特に大学ではその持てる資源（教育・研究成果）を地域、行政、企業、教育現場へと還元することが一つの重要な責務となっています。連携を通して、地域やこれらパートナーにおいては、課題の発見・解決となること、また大学においては、その関係性の中からさらなる実践的教育研究の推進を成すこと、またその機会を提供されることで教育・研究の充実を図りうることとなります。私の定年前までのおよそ10数年間も、まさに、このことが大きな位置を占めていました。様々な助力をいただきながら、学生と共にまた地域と共に行った連携活動の一端をお伝えしながら、本学の学生の持てる力を改めて発見、再確認をしています。携わった連携内容は、私が食分野（調理）の科目を担当していることから、主に食材の新しい使い方（料理法）、また、廃棄されるまたは利用しにくい、されにくい食材を使った商品開発、地域活性のために、地域の産物の有効な活用などでした。

学生と共に行う地域連携活動等においては綿密な相談（写真1）を行い、その目的とするところ、また大学として成し得ることを確認していきました。

研究・連携をより充実させるためには、生産者の声に耳を傾け、単に「食材」としてではなく、作る人、関わる人を通して、“食材と生産者（人）が繋がった”新たな料理・商品を提案していきたいと考えて進めていました。そのためには、製造工程の見学、収穫・生産の一端を体験し（写真2～7）、関わる人と話をすることで、食材が生産されるまでにどれだけ人々の努力が重ねられているか、大切に育てられているかを初めて知ることになります。このことが、新しくオリジナルな発想にとっても重要であることを実感してきました。

実際、依頼内容に呼応する考案・試作は考えるほど簡単なものではなく、イメージした新しい料理や商品案が地域や連携先に受け入れられるか、様々な形で検討を進めなくてはなりません。試作品は、連携先の方々とのミーティング、試食・評価を基に（写真8～11）ブラッシュアップし、様々なイベント（写真12・13）で試食会を行いました。これらのことは、各種業界誌に掲載され、レシピ集、商品化、販売と形を変え、成果（写真14～17）となっていきました。この他、小学校との授業協力やサポートとしての連携、地域の小学生や高齢者、父子への料理指導（写真18～20）他、その成果は目に見えないものですが、地域と共に連携した活動をおこないました。

ここにその一部を掲載し、多くの学びの機会を与えていただきました皆さまと、それに共に取り組んできた卒業生へ改めて感謝とお礼を申し上げます。



写真1. 生産者との相談 相模原市 黒川原木椎農園にて

菌床で生産されることが多い椎茸ですが、この農園では、原木に菌を植え付け、丁寧な生産をしています。いろいろな料理法を展開してほしいとの依頼でした。



写真2. 加工現場を見学し、その工程や皮の状態を調査（相模原市 ゆず加工工場にて）

藤野町の柚子の果汁はジュースやポン酢に加工されています。

残渣となる皮の廃棄を減らすため、皮を使った地域ならではの商品の開発（ゆず皮の活用）を依頼されました。



写真3 相模原市 鮎の一夜干しの加工法のデモン  
ストレーション（本学調理実室にて）

相模原市で獲れる鮎は干物に加工されていますが、調理法は焼くことがほとんどです。多くの人に美味しい相模原の鮎の干物を新しい調理法と共に紹介したいとのことでした。



写真4 あきる野市 秋川ブランド牛について生産者  
からの説明（本学調理実習室にて）

秋川ブランド牛はA5ランクの上質の和牛です。もも、すね肉ともに、ヒレ肉に劣らない美味しさですが、需要が少ないとのこと。これらの部位の美味しい料理の考案を依頼されました。地元の料理店で、ワンコインで提供できるようなメニューを提案しました。



写真5 収穫体験（横浜市小川キャベツ農園にて）  
キャベツは、季節により品種があり、食味・食感が異なります。

6月キャベツを用いた新規レシピの考案を行いました。（3年間）

3年継続し、その成果はレシピ集となりました。



写真6 にんにくの収穫と乾燥工程の体験（相模原市  
にんにく農園にて）

収穫法にはコツがあります。その後、乾燥をしますが、終点の見極めが難しく、手のかかる工程を初めて知りました。

そのにんにくを漬け込んだにんにくオリーブオイルを用いたレシピ開発を行いました。

有効な成分を生かすため、熱（高温）をかけない料理法を依頼されました。（2年間）



写真7 きゅうり、トマトの収穫体験（横浜市 山本  
農園にて）

神奈川県で優秀賞を受賞したきゅうりやトマトを使った新規レシピ開発（4年間）

提案したレシピは、JA横浜によりメニューカードになりました。



写真8 藤野町との意見交換（藤野町商工会にて）  
残渣となるゆず皮の有効な活用法 試作報告会  
藤野町商工会、法政大学、加工業者との連携（2年間）



写真11 ミーティング 本学にて  
おからファイバーの料理への利用



写真9 町田市 カトウファームにて  
町田市で自然な養鶏方法で養鶏場を営むカトウ  
ファームとの連携  
オリジナルプリンの開発  
フレーバープリン、チーズプリンなど新しい商品と  
して販売されました。



写真12 イベントへの参加  
逗子 森戸神社にて JCOMの取材を受ける  
500食以上の試食を提供、葉山産 夏みかんの活用



写真10 ミーティング 龍屋物産にて  
伊勢原 間引きミカンの有効利用



写真13 イベントへの参加  
横浜 赤レンガ倉庫前広場にて  
葉山産 生姜の活用



写真14  
上：葉山産夏みかん・生姜を使った連携が商品となる  
下：新規ベーグルの考案 高島屋新宿店、“大学は美味しい”にて販売



キャベツで包んだ焼売

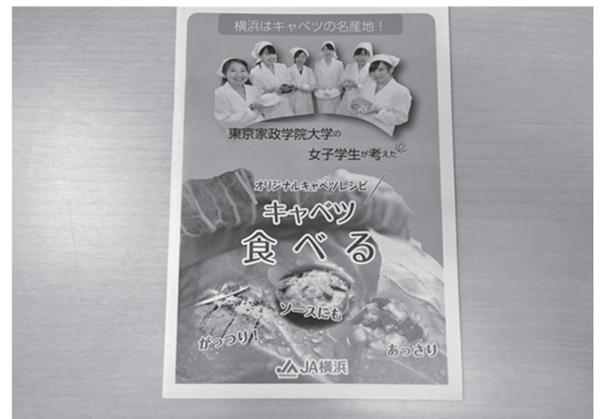


写真16 キャベツを使った新規レシピ考案  
上：日本農業新聞に掲載  
下：レシピ集 (JA横浜)



写真15 しろやま 商工会だよりに掲載  
相模原の鮎の一夜干しを使った料理の考案



写真17 藤野町産の柚子を使った商品開発に関わった方々 (上) と開発商品 (ふじの煮)



写真18 八王子市横山第一小学校にて  
家庭科「ご飯と味噌汁」の授業のサポート協力



写真19 本学実習室にて  
八王子市と北海道白糠町の小学生交流会での昼食づくり

に関するお知らせ

4 住宅防音工事希望団体の  
実行対象建設年次が拡大

5 博物館「数値の形と布  
への想い」展

お困りの方の救済として前払金などを、おしくる  
人じゅうや、お風呂で背中を洗いたい時動作でお次なら  
寝られない、楽しく身体を動かします

おつた付録

晴れやかに成人式  
二十卒まらだが開催されました

食材を使いきり  
料理教室を  
開催しました

町田市消防総監

2019年の東原団地開催  
広報塔を設置しました

町田市消防  
団員会誌

お問い合せ  
02924-21079

写真20 町田市広報  
相原地区での食材使い切り料理指導

文章を展示に合わせてポスター形式に組み合わせたので、その状態のままを提示する。

東京家政学院 九段・三番町校舎の変遷について

本学院校舎の初期の歴史について1975（昭和50）年に刊行された『東京家政学院50年史』および、総務課所蔵の写真、歴代卒業アルバムの写真、国立公文書館や東京都公文書館資料、法務局不動産登記記録（1996年以前の閉鎖簿本）、旧日本軍・米軍・国土地理院撮影航空写真などから解明しました。

※紙面の都合で現存校舎であるKVV会館、新1〜3号館、体育館の解説については省略しました。本稿はダイジェスト版ですので、詳しくは生活文化博物館年報第28号掲載、拙著『東京家政学院の九段・三番町校舎の変遷について』をご参照ください。

1. 九段・木造校舎 1925~1945

2. 九段・鉄筋コンクリート造校舎 1926~1966

三番町校舎の歴史は二七通りを挟んだ向かいの敷地（現：千代田区九段南19-8番地）に1925（大正14）年に建てられた木造2階建ての校舎に始まります。南側の庭を囲んだコの字の形状でした（写真1）。しかし建築後すぐに中庭を埋めるように鉄筋コンクリート造地下1階、地上4階の校舎が建てられています（写真2）。木造部分は1945（昭和20）年3月の空襲で焼失しますが、鉄筋コンクリート造部分は残り、戦後の1966（昭和41）年4月まで使用されました。



写真1 創建時の中庭 (50)

写真2 増築 (50)

3. 階段教室 1933~1945

1931（昭和6）年には二七通りの反対側の敷地取得が始まり、購入した土地（現：千代田区三番町22番地）で校舎建設が始まりました。「階段教室」は木造2階建ての切妻型で教壇を180度囲むように座席が配されています（写真3・4）。空襲で焼失しました。

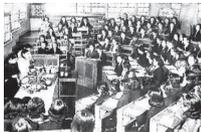


写真3 階段教室 (50)

写真4 階段教室正面 (卒)

4. 選科分教場 1933~1936



木造平屋の「選科分教場」は卒業アルバムの写真（写真5）からは2連の切妻型だったことがわかります。当時役所に提出された書類には「バラック」との表記もあり、3年間の寿命でした。

写真5 選科分教場 (卒)

5. 寄宿舍 1933~1945

「寄宿舍」は木造3階建てのハーフティンバーの山小屋風で大型の浴室も完備していたようです。寄宿舍のさらに奥には校長（大江スミ）の自宅が置かれていました。なお、3階建て校舎の建設に際し、支障部分が一部減築されました。



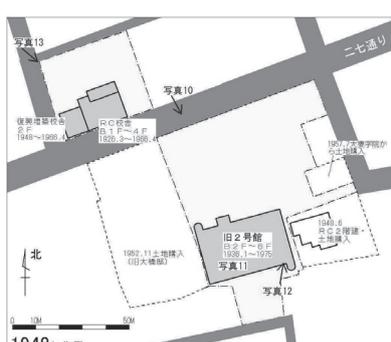
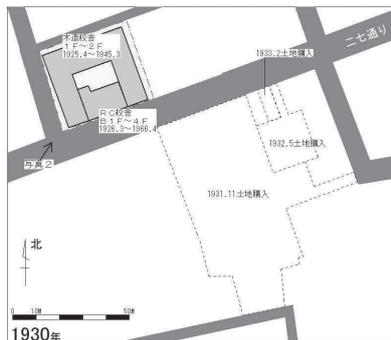
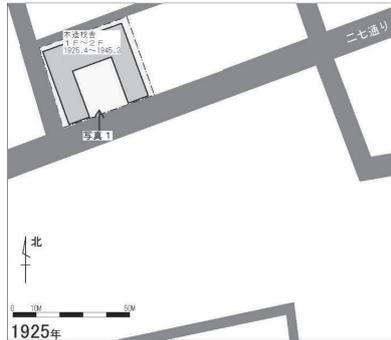
写真6 寄宿舍 (50)

6. 3階建て校舎 1936~1945

「選科分教場」の跡地には3階建ての校舎が建てられました。はっきりした完成年は判りませんが、1936（昭和11）年から数年内と思われる。建物の詳細は判りませんが、空襲で焼失したことから木造であった可能性が高いと考えられます。また階段教室手前には車庫が設置されていました。



写真9 左が3階建て校舎 (50)



博物館研究員・現代家政学助教 大宮司勝弘

7. 旧2号館 1936~1975

1936（昭和11）年1月には「旧2号館」が完成しました（写真7）。これは鉄筋コンクリート造地下2階、地上6階の大型の校舎で、空襲にも耐え、戦後は1975（昭和50）年まで東京家政学院のシンボルとなり、この校舎にあこがれて入学した学生も多かったそうです。

設計は建築家の権石（せんごく）政太郎（1879-1945）です。権石は映画館や劇場設計を多く手掛けた建築家で、「浅草松竹（旧帝国館）」（1927）、日本橋浜町の「明治座」（1928）などの設計で知られています。



写真7 旧2号館建設時(右は階段教室、左は選科分教場) (50)

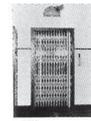


写真8 旧2号館内部の様子 (50)

空襲による壊滅的被害から復興へ

1945（昭和20）年3月から5月にかけての東京大空襲では甚大な被害を受け、本校舎も木造校舎は全て焼失してしまいました（写真10）。その後授業は一時的に千歳校舎で行われましたが、1948（昭和23）年からは、残された九段や旧2号館の校舎を改修し、一部増築を行って、授業が再開されました（写真11~13）。



写真10 空襲後 (50)

写真11 2号館5階講堂 (総)



写真12 旧2号館階段 (総)

写真13 復興後の九段校舎 (50)

8. 2階建て図書館 1952~1962

1952（昭和27）年3月に隣地の購入時に付いてきた鉄筋コンクリート2階建ての建物を改築し、木造2階建ての増築を行うことで「図書館」が完成しました。これは早くも1962（昭和37）年4月に解体されますが、木造部分はその後、蓼科の山の家として再利用されたそうです（写真14・15）。



写真14 2階建て図書館 (50)

写真15 手前が木造増築部 (総)

9. 九段北側増築 1953~1966

戦後の1953（昭和28）年4月頃には九段校地北側にも切妻型木造2階建てがL字状に増築されています。

写真16 九段校地北側の増築 (総)→



10. 旧3号館 1957～1986

1957(昭和32)年3月には敷地北西側に中学校として地下1階、地上4階建てRC造の「旧3号館」が建設されました(写真16～18)。設計は耐震設計の父とも云われ、東京タワーや大阪通天閣の設計で知られる内藤多仲(1886～1970)でした。



写真17(50) 写真18(卒1981) 写真19(卒1982)

11. 4号館 1960～1974

1960(昭和35)年11月に建設されました。地下1階、地上5階建て鉄筋コンクリート造の校舎で、4階に階段教室があり、連続するポルト屋根の載ったユニークなデザインの校舎でしたが、14年後の1974(昭和49)年に解体されており、この規模の建物としては非常に短命でした(写真18～24)。

写真20 南側(50)→

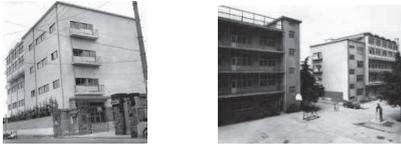


写真21 北側(総) 写真22 右4号館左旧3号館(総)



写真23 奥が4号館(総) 写真24 階段教室(総)

12. 茶室(旧大橋邸) 1952～1964

1952(昭和27)年に西側の土地を大橋邸(旧大橋図書館)から購入、そこにあった茶室はそのまま利用されました(写真25)。

写真25 茶室(旧大橋邸)(50)→



写真26 当時の正門付近(50) 写真27 当時の俯瞰写真(総)

13. 5号館 1963～1989

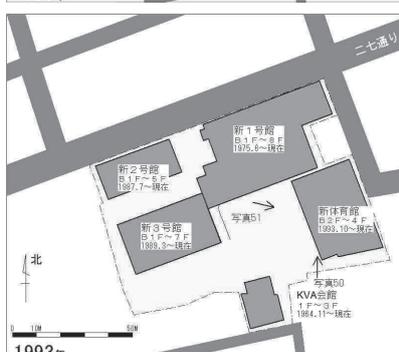
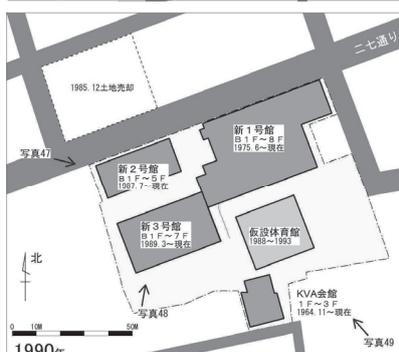
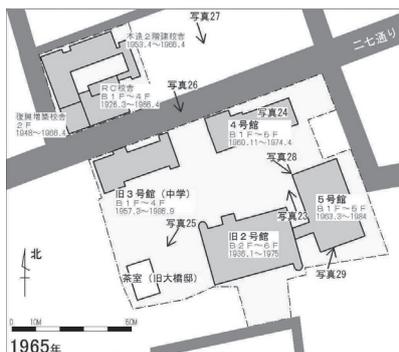
敷地南東側の「図書館」跡地にRC造地下1階、地上4階の「5号館」が完成しました(写真28・29)。図書室は建物南側の地下と1階に設置され、書庫部分は中間階の設置で容量を増やしていたそうです。旧2号館とは高架連絡通路で接続されていました。さらに後年、屋上に5階と非常階段が増設されています(写真30・31)。



写真28 竣工時(4階建)(50) 写真29 竣工時(南側)(総)



写真30 5号館と旧2号館(50) 写真31 5号館(5階増築)(卒1981)



14. 6号館 1965～1987

1965(昭和40)年3月に敷地南西部、旧2号館の隣に鉄筋コンクリート構造地下1階、地上5階の「6号館」が建設されました。高等学校として利用されていました(写真33・34)。また旧2号館解体後の1975(昭和50)年には玄関部分が増築されています(写真35～37)。1987(昭和62)年頃に解体されました。

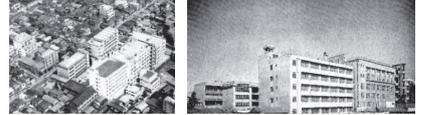


写真33 6号館竣工当時(50) 写真34 旧体育館、旧3号館、6号館(50)



写真35(50) 写真36(卒1981) 写真37 晩年の6号館(卒1989)

15. 7号館 1970～1987

1970(昭和45)年9月に「旧3号館」と「6号館」の間に建設されました。地下1階だけで地上はグラウンドの一部として利用された。いわば「形の無い」ユニークな校舎で、調理、服製の演習室や視覚教室などが置かれました(写真38)。6号館と同時に解体されました。

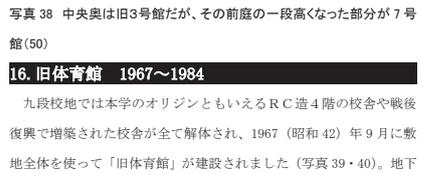


写真38 中央奥は旧3号館だが、その前庭の一段高くなった部分が7号館(50)

16. 旧体育館 1967～1984

九段校地では本学のオリジンともいえるRC造4階の校舎や戦後復興で増築された校舎が全て解体され、1967(昭和42)年9月に敷地全体を使って「旧体育館」が建設されました(写真39・40)。地下1階は学生食堂(写真41)、1階はホール及び会議室、2階は小体育館が2区画(写真42)、3階は大体育館(写真43)となっていました。1984(昭和59)年頃に解体され、九段校地は売却されました。



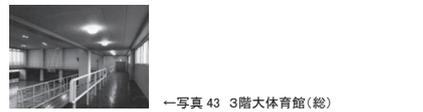
写真39(卒1981)

写真40(卒1982)



写真41 地下学生食堂(50)

写真42 2階小体育館(総)



→写真43 3階大体育館(総)

17. 仮設体育館 1988～1993

新体育館竣工までのつなぎとして、「新1号館」南側に1988年頃から93年頃まで「仮設体育館」が置かれていました。周囲は高い校舎に囲まれていたことから、屋根上に大規模なトップライトが設けられていたようです。

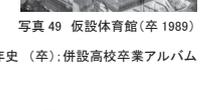


写真49 仮設体育館(卒1989)

写真出典 (50):東京家政学院50年史 (卒):併設高校卒業アルバム(総):総務課所蔵写真

※紙面の都合で写真32・44～48・50・51は省略しました。

詳細は、『東京学院生活文化博物館年報』第28号を参照してください。